http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/

We 35R

No.361　14/05/14

言文一致

ノーベル文学賞といって思いつくのは、君たちなら誰だろう？　日本人では川端康成と大江健三郎が受賞していて、かつては井上靖が受賞するのではないかといわれ、現在では村上春樹が話題になる。

ところで、日本人受賞者の川端や大江の作品を君たちは読んだことがあるのだろうか？実際に手にしたことがある諸君はごく少数派であろう。川端の『伊豆の踊子』は、かつて高校国語教科書に採られていたものだが、最近はあまり見なくなった。大江については、彼のエッセイが『ちくま評論選』の冒頭に収録されているが、小説となるとちょっと難しいかもしれない。私はかつて彼の『懐かしい年への手紙』という作品を電車を乗り過ごしそうになるほど熱中して読んだが、一方で『同時代ゲーム』は３回くらい途中で挫折し、未だに完読していない（笑）。

＊

川端の代表作といえば『雪国』であろう（わたしは『山の音』が渋くて好きだが…）。その冒頭はあまりにも有名であるが、みなさんご存じか？。

国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。

この文は、結構話題になることが多い。というのも、日本語の特色がよく表われていると考えられているからである。試しにこの文の英訳を考えてみよう。さて、どうなる？

日本文学研究家のサイデンステッカーさん（『源氏物語』の翻訳なども手がけている）は、次のように訳している。

The train came out of the long tunnel into the snow country.

さて、この翻訳を君たちはどう感じるだろうか？　英訳する以上「主語」が必要になるわけで、それをサイデンステッカーさんは「train」と考えたわけである。この翻訳について、東京大の安藤宏教授（近代文学）は、

天から下界のすべてを見渡す、いわば三人称の全能的な視点である。だが、日本語の実感としては、”The train”を主語にすることには、この場合かなりの違和感をともなう。むしろ、語りの視点は列車の中にあり、主人公と共に時間、空間を移動していると考えるべきなのではあるまいか。

（『日本文学の表現機構』岩波書店、2014）

と述べている。まったく同感である。

＊

A　昨日、（私は）悲しかった。
B　昨日、（君は）悲しかった。
C　昨日、（彼は）悲しかった。

の三つの文を比べると、Aに不自然さはないが、B・Cについては「だろう」といった推定表現がないと、何となく不自然な感じを受けるに違いない。英語でCの文が出てきた場合は、「（誰から見ても）彼は悲しかった」という客観的事実を前提とするそうだが、日常的な日本語の場合は、「（私が思うに）彼は悲しかった（ようだ）」と、一人称の語り手の判断が叙述に潜在することになる。

小説は、日常的な使い方を超えたBやCのような表現を受け入れるところに成立する。一般に我々は「言文一致」（のつもり）で文を書いているし、小説も「言文一致」で書かれていることになっているが、丁寧に分析してみると実に奥が深い世界なのである。